施工者に幸あれ 第37回

世界を見据える構造家・小西泰孝

朝倉幸子◉TH-1
illustration：Taco◉Switch・エンタテインメント

■番頭

覇志堂がわが編集長の屋号とは，すでにご承知と思う。フットワークのよさは昔から。佐々木睦朗事務所に，原稿の受け渡しに自ら伺ったある日，対応してくれたのが，新入の小西泰孝さん。その後で覇志堂は，「アレは，番頭さんにお渡ししておきましたので」と研究室の小西さんの先輩に申し上げたとか。今も，時々先輩に落ち着いているねと言われているようだ。現在，第一線で活躍している構造家・小西泰孝先生の雰囲気は，オトナな日本男子であります。

金沢の構造家，小西義昭氏を父に持ち，幼い時から「ハイキンケンサ」に同行していたという。優れた集中力と能力を持つ父への尊敬から，成るべくして二代目の構造家が誕生した。が，進学したのは，父が学んだ東京や京都でなく，仙台なのである。

■相棒

「KING OF HOBBY」というそうだ。小西先生が子供の頃から愛好しているアマチュア無線は，「個人的な訓練，実験，研究が目的で，それに人と人とのコミュニケーションが加わった科学的な趣味」なのだそうです。災害時にも役に立ち，年齢や立場を超えて，世界中に友ができる。昔は機械が高価だったところから，こんな表現になったのかというと，それだけではないようで，趣味でありながら国家資格が必要で，簡単に誰にでもできる簡単なモノではないから，というわけだ。そんなHAMに熱中していた小西先生は，無線の交換基地が多い「杜の都」を学校に選んだというわけ。カッコいいですね。

■コミュニケーション術

持って生まれたものか，HAMでの訓練か，人種を問わず，初めての出会いでも話ができる。アマチュア無線では噂話の類は御法度だから，万人が共有できる会話が繰り広げられるのだろう，と想像する。当然，語学力も磨かれる。それが，仕事にどのくらい役立っているか，自覚されていると思う。人類共通の話題には「食」も大いにある。江戸前鮨について語る時の口調は，絶対味覚を持っていそうな感じ。ご一緒してみたいもの。

建築家・隈研吾さんが設計された，中国杭州の中国美術学院プロジェクトでは，現地へも数回行ったと。さぞかし，旨い中国料理を食べたのだろうな〜。「青山にある構造設計事務所のブログ　建ものと食もの」を覗くと，やはり書かれています。読むにつれ，俄然，杭州へ行きたくなる。モチロン，建築を観にデスが，ついでに「食もの」も。

■毛鉤

小西泰孝先生は，鮎釣りをする，と聞いて，金沢の毛鉤の老舗である目細八郎兵衛商店を思い出す。毛鉤でつくった個性的なアクセサリーを見て，毛鉤というものが美しいことに驚いた。鮎釣りは，沢山の毛鉤の中から，「これで!」と，当たりを付けて選び，挑むそうです。藻しか食べないはずの鮎が，毛鉤が丁度よく揺らぎに漂っているのを見て，惑って釣られてしまう。隣同士で竿をさしていても，釣れ方はまったく違う。テクニックやマニュアルではなく，経験や積み重ねでもなく，おそらくセンス。センスの有る無しが，仕事人生にも大きな意味を持つ。

建築家の考えていることを探り，感性を形にもっていき，建築をつくり上げていく。構造家・小西泰孝の精神力に溢れる目は，世界を見据えている。